

復活節第三主日

2011.5.8

ルカ 24・13-35

今日復活節第三主日の福音は、私たちになじみ深いエマオの弟子たちの物語です。イエスの復活を語るルカ福音書をたどってみると、復活されたイエスが最初にそのお姿を示されるのは、今日の福音のこの二人の弟子たちに対してです。その二人の弟子の一人はクレオパという人だったと、その名前が記されていますが、もう一人の弟子のほうは、その名前すら記されていません。クレオパにしろ、もう一人の名前の分からない弟子にしろ、福音書においてここで始めて登場する弟子たちです。彼らは確かにイエスの弟子であると言われていますが、最初の十二人の弟子たちのように、名指しでイエスに呼ばれて、イエスにつき従って来た弟子たちではありません。それまで、いわば無名であったこの二人の弟子に、復活されたイエスをご自分を示してくださったと今日の福音は私たちに語っています。この物語を伝えたルカ福音書の著者は特別な思いをこめて、この二人の弟子への復活のイエスの現われの物語を記しているのではないかと思います。どういうことかと言うと、それまで取り立ててその存在すら知られていなかったこの二人の弟子の復活の主との出会いの物語を、この福音書の著者は自分自身の復活の主への信仰体験に重ね合わせるようにして捉え、その上で、同じ復活の主への信仰を生きようとしている私たちに語っていると思えるからです。この物語を含む福音書の著者は伝統的にルカという名で知られています。けれども、そのルカについて私たちはほんの少しのことしか知ることが出来ません。ルカがどのようにしてイエスの弟子たちの中に加わることになったのかは、どこにも語られていません。その意味では、ルカもまたこの物語の中の二人の弟子たちと同じ立場にいるのです。確かなことは、この福音書を著したルカは、復活のイエス・キリストを信じる最初の教会の中で、その信仰を生きる人々を対象にこの物語を書き記したということです。そのようなルカが、最初の弟子たちの教会の中で伝えられて来たこの物語を福音書に書き記したときの彼の心の躍動を感じ取りたいと思います。

ルカ福音書の著者が、あの日エマオに向ったこの二人の弟子の物語を書き記した意図は明らかです。確かに私たちは復活の主をこの目で見たわけではないかもしれない。けれども、復活の主があのだ二人の弟子の目を開くために行ってくださいったことは、私たち自身が経験していることではないかと、この物語を通してルカは主張しているのです。たまたま道連れとなった、行きすがりの旅人だとばかり思っていた復活の主の口からあのだ二人が聞かされた聖書のことばは、私たちも今聴いているではないか。エマオの宿で復活の主が二人に裂き与

えてくれたパンを、今私たちも味わっているではないか。復活の主があの二人の弟子にしてくださったことは、今わたしが教会の中で経験していることそのものではないか。あの二人の弟子が彼らの道連れとなってくださった復活の主と出会うことができたように、私たちも今この教会において、復活の主と出会わせていただいているのだ、と彼は言いたいのです。肉の目をもって復活の主を見ることが出来るかどうかは重要であるのではない。あの二人も、自分たちの前におられるその方がイエスだと分かったその時、それまでのイエスの姿は彼らの目には見えなくなった。けれども、そのことが彼らを狼狽させることはなく、全てが夢物語に終わることなく、彼らはその足で、そこから自分たちが逃げ出すように分かれてきた弟子たちのもとに戻り、その弟子たちの集いの中で、自分たちと道連れになってくださったあのお方が、復活の主その方であることを確認できたのだ。彼らのあのエマオへの旅の真の到着点はそこにあった。これら、全てのことは、わたしが復活の主を信じるこの信仰において経験していることなのだと、ルカ福音書の著者は、自分自身にも言い聴かせるように、熱い想いをこめてこの信仰の物語を伝えているのです。ルカ福音書のこの物語に込められた熱い想いに満ちたメッセージが私たちの心に伝わる時、私たちもまたあの二人の弟子たちのように、そしてまた、福音書に書き記されたこの物語を自分たちの信仰の物語として受け入れてきた無数の私たちの信仰の先輩たちのように、この教会の中で、その中心であるミサにおいて、復活の主との出会いを経験するのです。

わたしが洗礼を受けてカトリック信者となることが出来たのは、復活の主イエス・キリストが、私たちにもそれと気付かぬうちに道連れとなってくださったからです。その復活の主がエマオへの道の途中で、あの二人の心を開いて、彼らの胸のうちにわだかまっていた、イエスの十字架の意味を悟らせてくださったように、私たちの目をご自分の十字架に向けさせてくださったからです。不思議なことに、私たちは、自分とは関わりがないと思って来たイエスのあの十字架が、私たちの人生に関わるものとして、向こうから私たちの中に入ってきて、私たちの中にいつの間にか根を下ろしていることを経験したのです。それは、あの二人にとってそうであったように、十字架の死を超えて復活された主が私たちの中にもたらしてくださったことなのです。洗礼のときにわたしが経験したことは、あのイエスの十字架の苦しみの死は、この自分のために神の子であるイエスが自ら引き受けてくださったものであることを心底悟ることが出来たということだったはずです。あの時、私たちは決定的にイエスの十字架と結ばれたのです。そのことによって、私たちはこの自分をそれほどまでに大切に思っていてくださる神の愛を経験したはずです。その時から、私た

ちは自分の行く手に如何なる苦難が待ち受けていようとも、自分が受け入れたこの信仰によって、十字架の死を超えて復活されたイエスとともに歩むなら、それら全てを乗り越えることが出来るとの、希望の確信を与えられたはずです。あの十字架において、イエスはその血の最後の一滴まで流しつくすことによって、その神の子としてのいのちを私たちに与えてくださったのです。あの二人の弟子の心を燃え立たせたように、これら全てのことが、復活の主の息吹によって私たちの心を燃え立たせる時、私たちはミサの度ごとにいただくご聖体のパンのうちに、私たちのために十字架につけられ、復活された主イエスの愛のいのちの尊さ、ありがたさを味わうのです。

私たちの信者としての生活を振り返ってみると、私たちも、エマオに向った二人の弟子たちのように、信仰共同体としての仲間たちのもとを離れ、わたしたちのエマオを目指してしまうことがないわけではありません。そのような時にも、あの二人の弟子たちがそうであったように、私たちの心からイエスの十字架がもたらした謎の重みが消えてしまうことのないようお願いしたいと思います。そのような私たちのもとに復活されたイエスが寄り添ってくださって、私たちには謎となってしまったイエスの十字架の意味を、もう一度あらたに悟らせてくださり、その十字架を超えて、私たちを待つ復活の主のもとに戻る恵みを与えてくださるよう祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高